

サガン・セチエン著
岡田英弘譯注

蒙古源流

井上治

モンゴル語文獻『元朝秘史』の世界初の譯注である那珂通世の『成吉思汗實錄』(大日本圖書、一九〇七)が、我が國におけるモンゴル語文獻に依據した本格的なモンゴル研究の礎となり、その後の日本のモンゴル研究の發展に道を開いた。ここに、「譯注」という那珂の知的營爲が日本の東洋學とモンゴル學にもつ大きな象徴的意味がある。

那珂以後に邦譯されたモンゴルの歴史文獻として、戦前にかかるとるものには、小林高四郎の『蒙古の秘史』(生活社、一九四〇)と『蒙古黄金史』(生活社、一九四一)、江實の『蒙古源流』(弘文堂書房、一九四〇)、外務省調査部の『蒙古喇嘛教史』(生活社、一九四〇)などがある。戦後には、『元朝秘史』の譯注を村上正二や小澤重男²⁾らが、『アルタン・ハーン傳』を森川哲雄や吉田順一³⁾らが手がけた。ここで評者が特別な意義を感じるのは、小林・

村上・小澤がそれぞれ得意とする分野を中心に、那珂の創業を大きく發展させたことである。小林の譯業は村上と小澤に比してやや低い評價を受けるようだが、その二つの翻譯に見えた萌芽的知見はモンゴル文獻學屈指の名著『元朝秘史の研究』(日本學術振興會、一九五四)に結實した。ここに、我が國における『元朝秘史』研究の繼承と發展の過程が明らかになっている。

これに比して、小林の『蒙古黄金史』と江の『蒙古源流』には、翻譯あるいは譯注という形で繼承と發展が見られない。たとえば江は、當時明らかになつていた『蒙古源流』研究の情報をかなり廣くとりまとめた研究編を附した。當時それは充實した『蒙古源流』の文獻學的研究への取り組みではあつたが、研究が進展した現在ではもはや時代物となつた。この間、研究が停滞していたわけではない。『蒙古黄金史』(著者不明『アルタン・トブチ』)や『蒙古源流』、そして未だに和譯のないロブサンダンジン『アルタン・トブチ』などの重要なモンゴル語歴史文獻は、個別の論文において研究が蓄積されている。ただ、それを譯注の形で集大成することが待たれていたのである。

江以來六十年餘りを経て、ようやく『蒙古源流』研究が新たな展開を見せた。ここで評するのは、日本が世界に誇るモンゴル史研究者である岡田英弘⁴⁾が、長年にわたる研究の成果を踏まえてついに世に問うた『蒙古源流』(以下『源流』と略す―評者)の譯注である。岡田といえ、近年では、世界史としてのモンゴル史の位置づけに成功した『世界史の誕生』(筑摩書房、一九九二)がよく知られている。これは、モンゴルの歴史を廣く研究してきた岡田の學の集大成の一つであるが、評者にとっての岡田とは、

滿文老檔の研究や、各種史料を駆使した「蒙古史料に見える初期の蒙藏關係」(『東方學』一三三、一九六二)、「蒙古源流年表稿」(『史學雜誌』七一六、一九六二)、「ダヤン・ハガンの年代(一一二)」(『東洋學報』四八—三・四、一九六五—六六)などを世に送った岡田である。一連の滿文老檔研究は早くに結實した。その壮大なモンゴル史像もすでにまとめられた。岡田に残されたもう一つの仕事、それは、先に掲げた諸研究を支えた『源流』に對する研究の集大成であった。岡田が本書中で述べているように、一九五九年から六一年にかけてポツペに師事したことが、『源流』などのモンゴル語歴史文獻への本格的取り組みの端緒であったならば、この譯注があらわれるまでに、岡田は四十年以上の歳月をかけた。この間に岡田は、先の諸研究以外にも、「ドルベン・オイラトの起源」(『史學雜誌』八三一六、一九七四)や、「Die Ordos Jinong in Erdem-yin Tobci」(アジア・アフリカ言語文化研究』二七、一九八四)など、『源流』を主たる史料とする研究を數多く發表した。岡田こそが『源流』の譯注をおこなうべき研究者であることは、關係者には自明のことであった。

二

この譯本の目次を掲げ、簡単に内容を紹介する。⁽⁶⁾

見返し地圖

口繪 (v—viii)

目次 (ix—xxiv)

〔翻譯・注釋〕(一一—三四八頁)⁽⁷⁾

解題

一、『蒙古源流』の著者(二四九—三五六頁)

二、著者の世系(三五六—三六五頁)

三、『蒙古源流』の書名(三六五—三六六頁)

四、『蒙古源流』の底本(三六七—三七〇頁)

五、『蒙古源流』の翻譯と注釋(三七〇—三七二頁)

一では『源流』の著者サガン・セチエンとその時代のモンゴル史、特に清と内モンゴル諸部との關係を、『源流』、『欽定外藩蒙古回部王公表傳』、歴代の『大清實錄』の記事によって素描する。二ではサガン・セチエンの家系をチンギスにまでさかのぼって四世紀餘りにわたって跡づける。三では「エルデニ・イン・トプ子」が清朝に『蒙古源流』となつてあらわれた過程を跡づける。四ではモンゴル語『源流』の版本十三種を紹介し、この翻譯での底本を定める。五ではこの翻譯の基本的方針を明らかにする。これらのうち四と五については以下でもたびたび言及する。

三

譯注書の中心は譯である。しかし評者は、譯注者の流儀や文體觀に左右されて様相を異にする譯文を評することはかなり退屈なように思う。誤譯により文意が著しく損なわれるなどの重大な瑕疵があれば指摘すべきだが、そのような點は岡田の譯には見られない。そこで評者は、以下のような基準をもって本書を評しようと思う。

これまでのところ『源流』にはドイツ語譯と和譯があらわれているが、同じ和譯という點で限定すれば、本書が、戦前の江の和譯を凌駕した新時代の『源流』研究の集大成となつてゐることを

期待したいものである。以下、江譯との比較を踏まえ、評者が本書に期待する點を専門の立場から絞り込んで列舉し、その達成の度合いを基準として批評に臨むことにする。

まず江譯の大きな缺點を二點擧げる。

第一に、底本の問題がある。江は、鴛淵一が奉天方面から入手した青寫眞本の滿洲文鈔本を底本とし、これをシュミット⁽⁸⁾本とヘーニシユの滿洲語テキスト⁽⁹⁾、モンゴル文殿版刻本⁽¹⁰⁾、漢譯の『欽定蒙古源流』(國學文庫本)や張爾田『蒙古源流箋證』と對照した。當時の江は、ヘーニシユの研究からウルガ本が優れたテキストを含むらしいことを察していたが、結局それを見ることはできなかった。しかし、『源流』は元來モンゴル語で著されたものであり、江が據つた滿洲文鈔本はモンゴル文殿版刻本に由來する重譯である。テキスト系統からいえば筋(質)の悪い選擇であつた。第二に、江は『源流』の文獻學的考察に集中したのみで、そこに記された歴史や人物に對して研究も注釋もおこなわなかつた。また、『源流』の滿洲語やその滿洲語とモンゴル語の比較研究など言語學的考察もほとんどおこなわなかつた。さらに、『源流』が含む、傳承に由來するであろう物語や傳説にも何らのコメントも附さなかつた。歴史的・言語學的・文學的に江の譯注に見るべきものはない。

なお、些細なことと思われるかも知れないが、江の古文調の三重譯文は今の時代にはそぐわない。時代にあつた譯文こそが至當である。これを第三とする。

その一方、江譯には第四以下に示した三つの長所がある。岡田の譯注には、この江の長所を生かし、さらに發展させていること

が望まれる。

第四に、江の『源流』に對する文獻學的研究は、當時可能な限りのテキストと先行研究を収集してなされた。現在から見ればその見解の中に誤りを發見することは容易であるが、複数の版本が存在する歴史的文献を扱う者の責務として文獻學の基本に徹したことは高く評價できる。

第五に、筋(質)が悪いとはいへ、己の據つた滿洲語テキストを併載したことがある。これにより、江の譯をテキストに依據して檢證することが可能である。

第六に、人名・山川・地名・佛名・稱號の蒙古名・漢名對照索引と漢名索引を備えたことである。索引のもたらす利便性は改めていうまでもない。

以上をまとめると、(筋(質)の良いモンゴル文テキストを選択すること)、(先行研究を網羅すること)、(歴史的・言語的・文學的・文獻學的側面からの考察を加えること)、(自分の據つたテキストを示すこと)、(索引を附すこと)、(自然な現代日本語譯をおこなうこと)、これら六つが本書に期待される事柄である。

これらが達成されているか否かを確認する手がかりとして、解題の五の部分に記されている譯注方針(三七〇—三七二頁)を見てみたい。

- ① 翻譯に當たつては、デ・ラケヴィルツ本の原文に從つた。
- ② 自由な現代語文になるよう心掛けた。
- ③ 原本に多い韻文の部分では、韻ごとに行を變えて、原本の氣分を壞さぬようにした。
- ④ 滿洲譯本と漢譯本にあつてモンゴル語原本にはない分巻を

採用せず、内容に従って【序】【總論】【第一章 インドの王統】(以下第九章までであるがここでは省略する—評者)【跋】の區別を設け、さらにこれらの中に含まれている内容の見出し(たとえば「1 世界の成立」など—評者)をつけた。

⑤底本にある韻文の【頌】は、その内容が歴史と關係がないのでこの譯本には含めなかった(傍線—評者)。

⑥原文中に見える年代にはそれに相當する西曆年数を挿入した。

⑦注釋はこれまで岡田が發表した論考すべてを參考にしつつ、原文の理解に役立つようにした。

これらを、前に示した六つの期待される事柄と比べてみよう。まず(筋(質)の良いモンゴルテキストを選択すること)について。①に示したように、岡田はデ・ラケヴィルト本の原文と對照した、現時点でもっとも質の良い校訂モンゴル語テキストの一つである。岡田の底本選擇は明らかに江よりも筋が良い。若干氣になることを挙げれば、岡田は、底本の不備を他本によって補う作業を若干の箇所でおこなっているが、補っていない箇所もある。おそらく文意が通じるといふ理由で不備を補わなかったものと思われるが、岡田自身も参照している烏蘭(『蒙古源流』研究)瀋陽、遼寧民族出版社、二〇〇〇)がウルガ本の不備を補う方向で『源流』の正文復原に取り組んだことを考へるならば、デ・ラケヴィルト本よりも烏蘭本に據つてもよかつたかと思われ

次に(先行研究を網羅すること)について。⑦に示したように、岡田は自分の論考すべてを參考にして注釋に當たつたという。確かにその通りであり、注釋の隨所に岡田の知見が盛り込まれている。また岡田は、那珂通世(前掲書)、和田清(『東亞史研究』滿洲篇)『東洋文庫、一九五五。』東亞史研究(蒙古篇)『東洋文庫、一九五九。』モスタールト(*Erden-yin Tobci, Mongolian chronicle by Saryang Seken*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1956)『ハイニンゴ(*Die Familien- und Kirchengeschichte-schreibung der Mongolen*. T. 1. Wiesbaden: Otto Harrassowitz, 1956)』青木富太郎(『萬里の長城』近藤出版社、一九七二)『本田實信(『モンゴル時代史研究』東京大學出版會、一九九一)、烏蘭(前掲書)など重要な研究を参照している。しかしながら評者はさらに参照すべき研究があると感ずる。いくつか例を挙げると前に、底本に存する不備の補足について言及したが、この種のテキスト間の異同に觸れるならば、森川哲雄の『源流』諸本に關する諸研究¹⁶⁾に觸れて欲しかった。森川が内モンゴルとウランバートルでおこなった徹底した『源流』諸本の探求とそれに基づく研究は他の追従を許さない優れた研究である。他にも、『蒙古史料』に見える初期の蒙藏關係にやや先だつてチベット史料によって一三世紀から一四世紀のチベット・モンゴル關係を論じたりヨリヒ(『Монголо-Тибетские отношения в XIII и XIV вв.』*Филология и история монгольских народов. Памяти академика Бориса Яковлевича Вадимирцова*. Москва: Издательство восточной литературы, 1958: 333-346)『源流』のチベット史記述とチベット語文獻との密接な對應關係について適確

な指摘をおこなった石濱裕美子（『エルデニ・イン・トプチ』におけるニシマ派文獻の影響について）『史観』一二三、一九九〇、四七―五八頁）などにはぜひ言及して欲しかった。評者は、廣く『源流』研究を網羅することの副産物としての浩瀚なリファレンスが附されることを本書に期待したが、その期待はかなえられなかった。文獻學的考察の範疇内にとどまったとはいえ、江が當時あらわれていた關連の研究を網羅したことを考えると、岡田は江にはやや及ばなかったといわざるを得ない。

次に（歴史的・文學的・言語學的・文獻學的側面からの考察を加えること）について。⑤に傍線を引いて示した「歴史と関係がない」の部分から、岡田がこの譯注において歴史的事柄に主たる注意を拂ったことがうかがわれる。歴史的な側面からの考察は岡田がもつとも得意とするところであり、まさに岡田の獨擅場である。このことは、⑥に示した、原文中に見える年代に相當する西曆を挿入した、ということからも明らかである。ここには「蒙古源流年表稿」の成果が餘すところなく反映されている。また、『源流』に見えるインドとチベット關連の記述、モンゴルとチベット（佛教）との關係については、「蒙古史料に見える初期の蒙藏關係」に由來する興味と關心が完全に持續されており、かなりの量の注釋を施している。この方面は日本のモンゴル研究者が苦手とする分野であるので、學界に裨益するところは大きい。いうまでもなく、數多くの原典を駆使して『源流』の記述内容を歴史的に檢證している。江は『源流』に記された記錄の歴史的考察や檢證を全くおこなわなかったのであるから、本書は歴史に重點を置いた初の『源流』和譯本ということができる。

これと對照的なのは、文學と言語の側面からの取り組みである。まず文學の側面から見てみよう。『源流』を含む一七世紀のモンゴル年代記に含まれる物語や傳説は、モンゴル人の古典文學研究⁽⁷⁾者が早くから注目し研究してきた。岡田は、③に示したように、原文中の韻文を譯す際には韻ごとに行を變えるなどの配慮を示し、『源流』の文學性を決して無視はしていない。また、『源流』に見える物語や傳説も無視はしていない。數例を挙げるなら、モンゴルの始祖傳説（六七頁）、モンゴルの名の由來（八〇―八一頁）、テムジンとハサル⁽⁸⁾の不和（八二―八六頁）、アルガスン・ホルチの物語（八八―九四頁）、グルベルジ・グワの物語（一三〇―一三三頁）、チングス悼歌（一三六―一三九頁）、朱哥ノヤンの物語（一六〇―一七三頁）、トガン・テムル・ハーンの悲歌（一七三―一七五頁）、モンゴル六萬人隊のわけ（一七六頁）、マンドウフイ・セチエン・ハトンの物語（二二―二三頁）などに注釋を附してはいるが、その多くが傳説や物語そのものにはあまり關係がない。岡田の歴史重視の姿勢は、『源流』の文學を代表する「底本にある韻文の【頌】（奥書の韻文―評者）」をその内容が歴史と關係がないとしてこの譯本には含めなかったとの斷りがよく示している。このように、岡田には『源流』を文學的に捉えようとする姿勢はやや希薄であるが、江と比べた場合、岡田の注釋には『源流』の物語や傳説を歴史的に檢證する姿勢が見える。よって、江との比較で見た場合には、岡田はこれを凌いだと評してよい。

言語の側面からの考察についてであるが、岡田にはこの方面から『源流』に迫る姿勢がないので、特に文法的な側面からの分析

はほぼ皆無である。しかし、前に觸れたインドとチベットに關係する記述に見えるサンスクリットとチベット語のモンゴル文字轉寫の復原にはかなりの精力を注ぎ込んでゐる。評者は、これを『源流』における外來語表記の考察に大變有益な試みとして高く評價する。この點でも岡田は江を凌いだといえる。

最後に、江がもつとも力を入れた文献學的方面においては、遺憾ながら岡田は江を上回つていない。岡田は、解題の四でデ・ラケヴィルツ本を底本とする旨を明らかにするところで、十三種類のモンゴル語『源流』の版本を紹介している。岡田の擧げる諸本は、これまで刊行されたモンゴル語『源流』をほぼすべて網羅しているが、それぞれの本の特徴や相互の系統關係などには一切言及していない。この方面での權威である森川の研究に言及していないことからも、岡田がこの問題を重要と感じていなかったことがうかがわれる。ただし、岡田がデ・ラケヴィルツ本を選択したことに大きな間違ひがあるわけではない。岡田はすでに各本の特徴や系統を熟知した上でこれを選択したに違ひないが、その理由が説明されていないのである。

次の〈自分の據つたテキストを示すこと〉であるが、これは全く何もない。我々は岡田譯に覺えた疑問を底本に立ち戻つて檢證しなくてはならない。いくつかの箇所を補つてゐるということは、岡田はその作業過程で正文を構想したはずなのである。江が滿漢二つのテキストを勞を惜しまず示したこととは對照的である。

同じことは〈索引を附すこと〉にもいえる。本書に索引はない。岡田が獨自に立てた章・節の見出しがかなり丁寧にできており、

主要な人物や出來事はここである程度確認することができるが、フィーツェらのロブサンダンジン『アルタン・トブチ』、『源流』デ・ラケヴィルツ本、シャグダルスレンらの『アサラグチ史』¹⁹⁾に逐語索引があり、これがモンゴル語テキストに基づく研究に大變有益であることを考えると、本書はモンゴル語を解する學者らに前掲三書ほどの利便性は與えないであろう。

最後に、〈自然な現代日本語譯をおこなうこと〉について。評者は、これを本書の最大の特徴と見る。②に示したように、岡田は自由な現代語文になるよう心掛けたという。和譯物を評するに日本語としてどれだけ自然な譯に成功しているかは最大の評價ポイントである。まさに言に違わず、岡田の譯は今の時代に十分に受け入れられる日本語となつてゐる。岡田は、翻譯のもつとも重要な任務を見事に遂行した。衆人に受け入れられる岡田の『源流』譯があらわれたことにより、筋の悪い底本選擇に基づく江の古文調日本語譯を見る必要はなくなつた。

これら以外の些細なことをあげつらう必要はなからうが、モンゴルの歴史だけでもほぼ四世紀の時間を含む『源流』である。ここに登場する人物は少なくない。讀者の理解に資するために系圖を附ければよかつたであろう。また、見返し地圖に、比定しうる限りで『源流』にあらわれる地名を記入すれば、讀者の理解に資したことであろう。

以上をまとめると、専門家・研究者としての立場からは満足でない部分があるが、評者が設定した基準はおおむね満たしてゐる。何よりも翻譯としての最大の義務を十分に果たしてゐるのであるから、評者の主觀的な基準を満たしていない部分があつたとして

も、それはこの労作の價値を損ねるものではない。基準を満たさなかつたのは、岡田が、モンゴル史研究者として、そして日本人として、自己のなすべき範圍を「和譯と歴史」に明確に絞り込み、それに自己を律して作業に當つたことを反映しているのである。

四

締めくくりに、別にもう一つ評價の基準を立ててみよう。専門家ではなく一般讀者としての立場から本書はどう評價できるであろうか。

もし岡田が前に示したすべての基準を満たしたものを刊行したならば、一大巨冊ができあがつていたのであろう。そうした書籍に一般讀者は手をのばさない。せっかくの名譯も、専門的研究書の中に收められてしまつたら日の目を見ない。わかりやすい日本語譯を中心に、専門家のみがかかるような注釋を極力控えたからこそ、本書は四〇〇頁を超えず廉價に收まつている。一般讀者が手にしやすいモンゴルの文學作品や民間傳承の和譯は、小澤の岩波文庫本『元朝秘史』（一九九七）、平凡社東洋文庫に收められた村上の『モンゴル秘史』、モスタールトの『オルドス口碑集』（一九六六）、若松寛の『アセル・ハーン物語』（一九九三）と『ジャンガル』（一九九五）など數えるほどしかない。岡田譯『源流』はこれら名著の中に列し得る。専門的には物足りなくとも、人口に膾炙していない、しかも難解な表現を多く含むモンゴルの歴史文獻を、わかりやすい日本語で譯し、廣く一般讀者の手にまで提供した岡田の貢獻に對し、『源流』に關わりをもつた一人として心からの感謝の意を表するものである。

註

- (1) モンゴル語書名は『エルデニ・イン・トブチ (Erdeni-yin tobchi)』（簡稱）。
- (2) 村上正二（譯注）『モンゴル秘史』一—三、平凡社（東洋文庫）、一九七〇—一九七六。小澤重男（著）『元朝秘史全釋』上・中・下、風間書房、一九八四—八六。同（著）『元朝秘史全釋續攷』上・中・下、風間書房、一九八七—八九。
- (3) 森川哲雄（著）『アルタン・ハーン傳』の研究、九州大學教養學部、一九八七。吉田順一他（譯注）『アルタンハーン傳』譯注、風間書房、一九九八。
- (4) 以下、一般的な意味での譯注者との混亂を避けるため、岡田氏を譯注者と記さず、敬稱を略して岡田と記すことをお許し願いたい。
- (5) たとえば、滿文老檔研究會譯註『滿文老檔』I—VII、東洋文庫、一九五五—六三、など。
- (6) 見返し地圖、口繪、目次の紹介は割愛する。
- (7) 『翻譯・注釋』は評者が補つた。ここには、岡田が獨自に設けた章・節の見出しが底本の該當箇所とともに示されている。
- (8) Schmidt, I. J., trans., *Geschichte der Ost-Mongolen und ihres Fürstenhauses, verfasst von Samang Selsien Chingutadschi der Ordus*. St. Petersburg-Leipzig: Gretsch, Cnobloch, 1829.
- (9) Haenisch, E., ed., *Monggo Han Sai Da Sekiyen*. Die

- Mandschufassung von Sečen Sagang's mongolischer Geschichte. Nach einem im pekinger Palast gefundenen Holzsdruck in Umschreibung.* Berlin: Verlag Asia Major, 1933.
- (10) 武英殿版本がのさくくーニシユにより刊行された。Haenisch, E., edit., *Der Kienling-Druck des mongolischen Geschichtswerkes Erdeni yin tobci von Sagang Sečen.* Wiesbaden: Franz Steiner Verlag GMBH, 1959.
- (11) のさくくーニシユにより刊行された。Haenisch, E., edit., *Eine Urga-Handschrift des mongolischen Geschichtswerkes Sečen Sagang (alias Saung Sečen).* Akademie-Verlag: Berlin, 1955.
- (12) オルロフスカヤがロブサンダンジン『アルタン・トブチ』の言語に関する研究 (Орловская, М.Н., *Язык "Алтан тобчи".* Москва: Издательство "Наука", Главная редакция восточной литературы, 1984.) を發表しているが、『源流』の言語研究は少ない。数少ない例として、そのモンゴル語と滿洲語を比較した Kyoto Maehono, *Kasus-Entsprechungen des Mongolischen und Mandchui: anhand von Sayang Sečen's Erdeni-yin Tobci und seiner mandschurischen Übersetzung.* Wiesbaden: O. Harrassowitz, 1992. を舉げてみる。
- (13) Sayang Sečen, *Erdeni-yin tobci ('precious summary'): A Mongolian Chronicle of 1662.* The Urga text transcribed by M. Go, I. de Rachewiltz, J.R. Krueger and B. Ulaan. [Canberra]: Faculty of Asian Studies, The Australian National University, 1990.
- (14) たごえは、一五二頁注(一)、『二四四頁注(三)』二四五頁注(二)など。
- (15) たとえば、二七三頁一八行目―二七四頁一行目にかけて「ゲロンらは、タブヌン、ホンジン、太師、宰相らと同じにしよ。う。」とある部分は、他本によれば「ゲロンらは、タブヌン、ホンジン、太師、宰相らと同じにしよ。う。トイン、シバンチャ(シバガンチャ)、ウバシ、ウバサンジャらはオンリグートと同じにしよ。う。」のように傍線部を補うことができる。この部分については拙著『ホトクタイ―セチェン―ホンタイジの研究』(風間書房、二〇〇二)に對する森川哲雄の書評にも指摘されている(『内陸アジア史研究』一九、二〇〇四、八八―八九頁)。
- (16) 『蒙古源流』殿版系諸本に關する諸問題について(『布日潮風博士古稀記念論集 東アジアの法と社會』汲古書院、一九九〇、四九九―五二三頁)、『モンゴル國立中央圖書館所藏『蒙古源流』寫本について―『白い歴史』とジャミヤン公將來本―(『歴史學・地理學年報(九州大學教養部)』一八、一九九四、一―一八頁)、『蒙古源流』の寫本とその系統について(『アジア・アフリカ言語文化研究』五〇、一九九五、一―三四頁+寫真十五枚)、『蒙古源流』の諸寫本とその歴史學的見地からみた比較研究―『Erdeni-yin tobci, a』の校訂―(平成六・七年度科学研究費補助金[一般研究C]研究成果報告書[課題番号〇六六一〇三四三])、研究代表者森川哲雄、平成八年三月)。

- (17) Ц. Дамдинсүрэн, *Монголын уран зохиолын тойм*. Нэгдүгээр дэвтэр. Улаанбаатар : Улсын хэвлэлийн газар, 1957 ; Д. Цагаан, “XVII-XVIII зууны үеийн түүхийн сурвалж бичгийн доторхи уран зохиол”. *Монголын уран зохиолын тойм*. Хоёрдугаар дэвтэр, Улаанбаатар : Шинжлэх ухааны академийн хэвлэл, 1976 : 93-151 ; Ш. Гадамба, “XVIII-XVIII зууны үеийн түүхийн сурвалж бичгийн доторхи уран домог”. *Монголын уран зохиолын тойм*. Хоёрдугаар дэвтэр. Улаанбаатар : Шинжлэх ухааны академийн хэвлэл, 1976 : 151-179 ; С. Кесигтуяац, *Ертөнц-ий монгуул стиг-ийн төгсгөлийн*. Тэнгэрийн : Өвдл монгуул-ын багасид кайкэд-ийн кайкэд-ийн готуу а. 1985 ; С. Кесигтуяац, *Монгуул-ын ертөнц-ий шид а жөкүйд-ийн судил*. Давдугаар : Өвдл монгуул-ын кайкэд-ийн готуу а. 1988 ; Вайга, *Арван дөвдүгээр жагын-и монгуул төлхөн итгэн жөкүйд*. Көкөвсөт : Өвдл монгуул-ын агад-ын кайкэд-ийн готуу а. 1986.
- (18) 同じ箇所で岡田は「江やナ・ラケウイルト本の成立事情にこころ興味深い逸話を載せつゝるが、これは文献學的考察を意圖したものであらう。」
- (19) Vietze, H.-P., Gendeng Lubsang, *Alten Tobki: Eine mongolische Chronik des XVII. Jahrhunderts von Blo bzain bstan 'in*. Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, 1992.
- (20) Ts. Shagdarsuren & Lee Seong-Gyu (Transcription and Index), *Вухта-уйн Азгарүй нөгөтэй (уйн) кайке*. (Textological Study). Vol. 1. Ulaanbaatar: Centre for Mongol Studies National University of Mongolia & State Central Library of Mongolia, 2002.
- 1100四年10月 東京 刀水書房
A5判 116+371頁 六〇〇〇圓
- (本稿は平成一七年度日本學術振興會科學研究費補助金基盤研究(B)(1)による成果の一部である。)